モモが見つけたふるさと

さかき かずこ・さく
立石鉄臣・え

大日本の創作どうわ
大日本図書

NDC. 913
モモが見つけたふるさと
さかき かずこ
大日本図書　1977（昭52）
100p. 22cm（A 5）
（大日本の創作どうわ）

大日本の創作どうわ

1977年2月28日　第1刷発行
1977年7月10日　第2刷発行

著者
さかきかずこ

画家
立石鉄臣

発行者
佐久間裕三

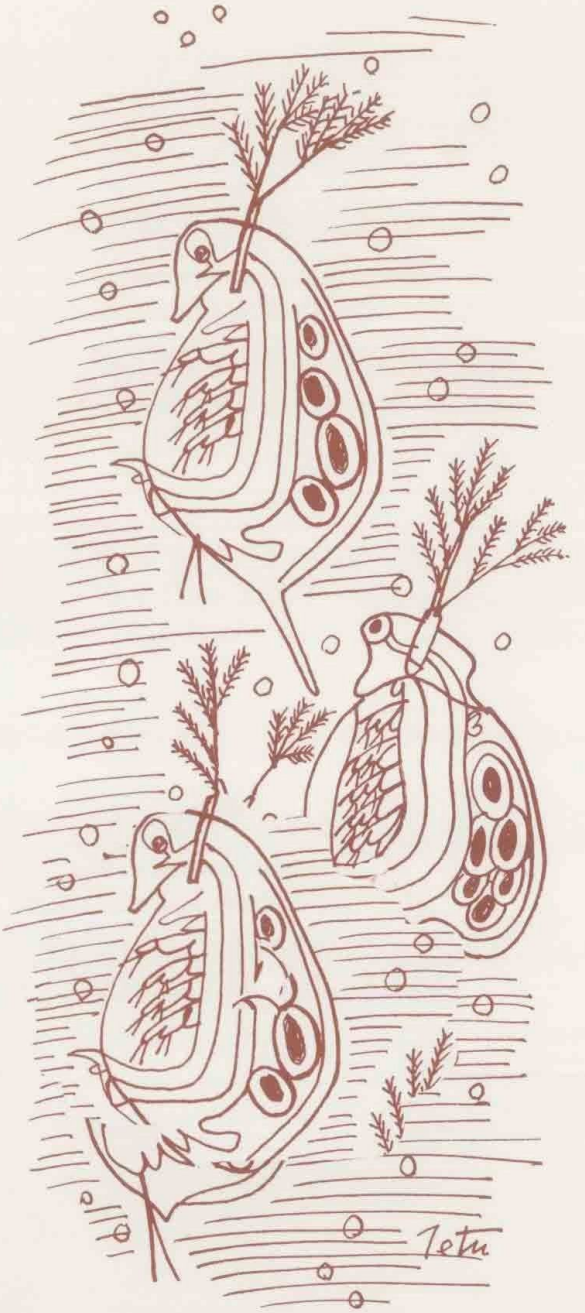
印刷／東洋印刷
製本／岸田製本

発行所
大日本図書
東京都 中央区 銀座
1丁目9番10号
電話・03-561-8671
振替・東京9-219番

モモが見つけたふるさと　© 1977 K. SAKAKI & T. TATEISHI
8393-217136-4398

モモが見つけたふるさと

さかき かずこ＝さく
立石鉄臣＝え



大日本の創作どうわ 大日本図書

モモが見つけたふるさと／もくじ

モモはひとりぼっち……5

旅のはじまり……15

遠い遠いむかしのこと……25

川はうたってなんかいない……45

ツクボコのうた……69

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

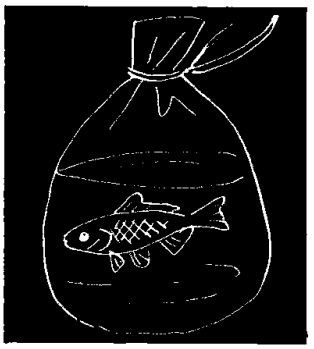
❁この本をかいた人❁

さかきかずこ

京城（ソウル）生まれ。本名，坂木和子。児童文学同人誌「子どもの町」「てんぐ」で創作活動を続ける。おもな作品に「ガララン病になったライオン」（日本児童文学者協会編　文研出版刊『現代のぐうわ　第2巻』所収）がある。
日本児童文学者協会会員。「てんぐ」同人。
現住所：東京都八王子市打越1308

立石鉄臣（たていし　てつおみ）

1905年，台北（タイペイ）生まれ。国画会会員。著書に『細密画の描き方』『細密画の技法とその展開』（ともにアトリエ社）がある。



モモは　ひとりぼっち

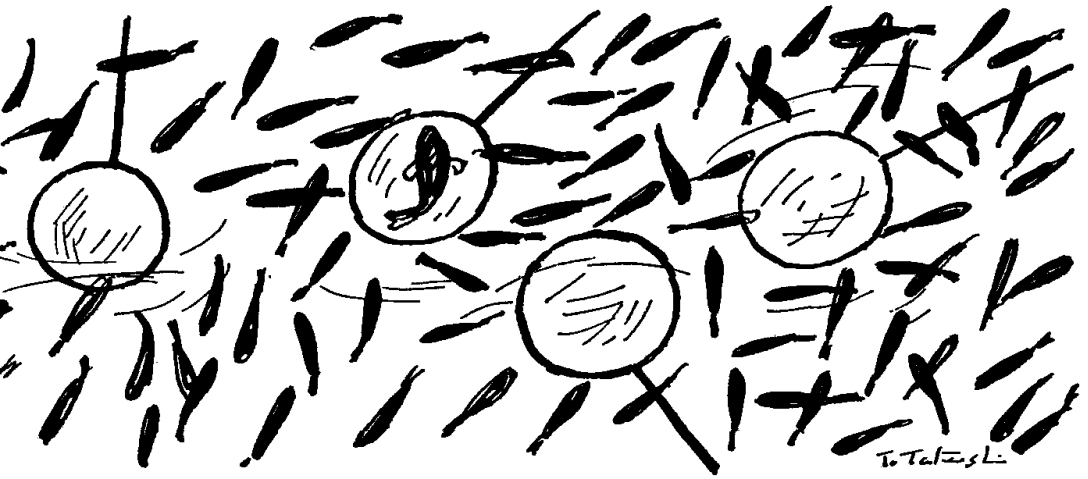
モモには、はじめ、名まえなど、あったわけではありません。

モモは、ただ、金魚とよばれていました。

けれども、えんにちの日に、小さな女の子に金魚すくいのあみで、すくいあげられたそのときから、モモになったのです。

「つった、つった。」

女の子は、まるで大きなさかなでもつりあげたように、とくいになっ



てさけびました。

「モモちゃん、つった！」

女の子は、たしかにそういったのです。

ところが金魚は、自分のことをモモちゃんとよばれたのだと思ってしまったのです。なにしろ、とつぜん、水の中からすくい出されたので、すっかりあわてていましたから――。

ほんとうは、モモちゃん、というのはその女の子の名まえですのに。

そういうわけで、そのときから、名なしのちっぽけな金魚は、モモになったのです。

でも、名まえがついたからといって、とくべついいことがあったわけではありません。

「ひらひらしたしっぽの金魚だったら、もっといいのに……。」

女の子は、ビニールのふくろを、さっとさかさまにして、モモを庭の池にはなしました。

モモは、せまくるしいビニールのふくろの中から、急に広いところへ出たので、小さなしっぽを左右にふって泳ぎまわりました。けれども、すぐに、この池には自分のほかに、だれもいないことに気がつきました。

プラスチックの水そうも、セメントの池も、たいしてちがいはなかったのですが、水そうには仲間が大ぜいいました。そのかわり、いつも金魚すくいで追いまわされる毎日でした。

セメントの池のほうは、追いまわされないかわり、仲間はだれもいません。

モモは、みんなに会いたいな、と思ったり、追いまわされるのはいやだから、このほうがましだわ、と思ったりしていました。

女の子は、うずまきもようのついたふをひとつ投げ入れて、それっきり、やってきませんでした。

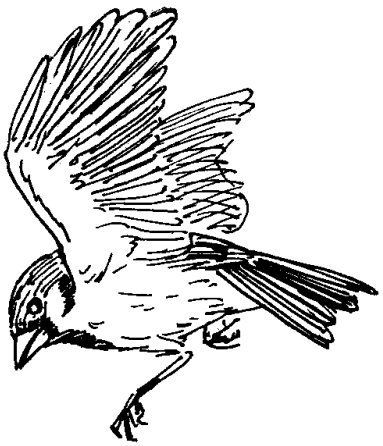
池の中は、おまんじゅう形の石ころがひとつあるだけで、あとは、水と、うずまきもようのふがういているだけなのですから、モモはすぐに

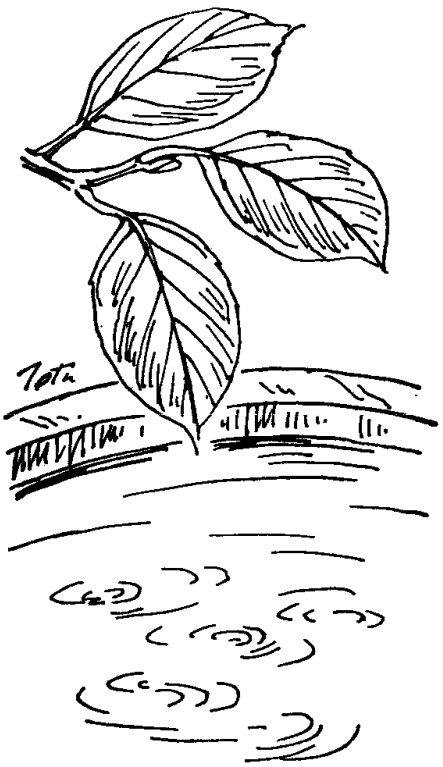
あきてしまいました。

「ひとりぼっちなんて、つまらない……。」

モモのためいきは、プクプクとあわになっていくつも水の上にうかびました。

ツバキの枝にとまっていたスズメが、小さな池の、小さなあわを見つ





此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

けました。スズメは、ぱっといっぺん飛びたってから、下枝にとまりなおして、池の中をのぞきこみました。

モモは、スズメの頭が水にうつったのを見つけて、大いそぎで水面から顔を出すと、

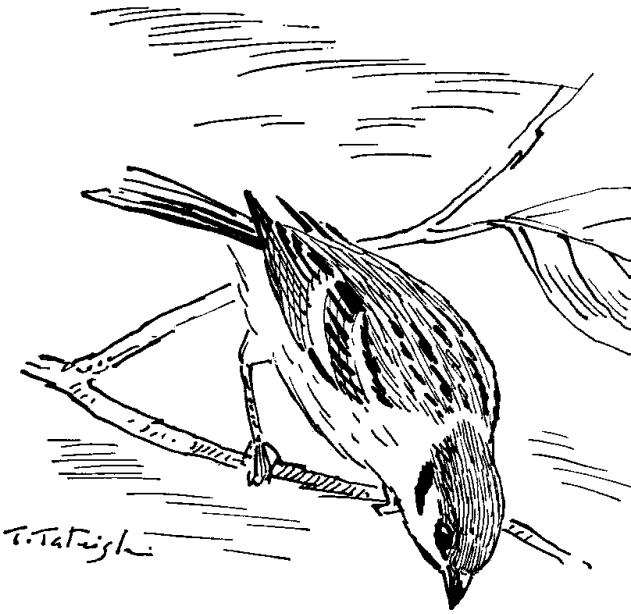
「ね、おねがい。ともだちになってくれない？　ひとりぼっちでさびしいの。」

と、いいました。

するとスズメは、

「スズメが、金魚のともだちになるなんて聞いたこともないな。」

と、さもばかにしたようにいいまし



た。

「考えてもごらんよ。おまえは水の中だしさ、おれは空を飛びまわる。どうやってともだちになるんだい。」

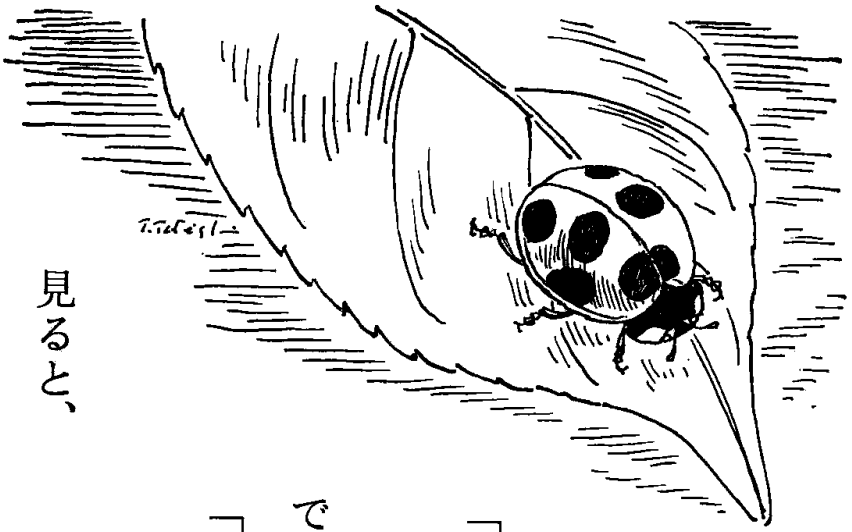
「それはそうだけど、こうやってお話するだけでいいわ。」

モモは、いまにも泣きだしたい気持ちをがまんしていいました。

「そんな、ちっぽけな池の中にいて、とくべつおもしろい話があるというのならば、聞いてやらないこともないけどさ。」

スズメは、もったいぶったいい方をして、それっきり、どこかへ飛んでいってしまいました。

モモは、しかたがないので、また、あわをプクプクやっていました。
（おもしろいお話ねぇ……。）
モモは、考えこみました。おもしろい話があれば、スズメは、もしかしたらともだちになってくれるかもしれません。
けれども、まったくのところ、スズメのいうとおり、この池の中におもしろい話なんて、何もありません。あるのは、たいくつだけです。
モモは、池の中から、上のほうを見あげました。上には、青くすきとおった空が一面にひろがっているだけで、あとは、ツバキの葉の先が少しと、セメントの池のふちが見えるだけです。
それでも、ときたま、池のふちには虫たちがやってきます。
ちょうど、ツバキの葉の先に、ナナホシテントウムシが休んでいまし



た。

「ねえ、ともだちになってくれない。」

ナナホシテントウは、知らん顔をしています。

「聞こえないのかしら。」

モモは、ひとりでぶつぶついうと、大きな声で、またいいました。

「ねえ、おもしろいお話、なんかなあい。」

ナナホシテントウは、ちらっとモモのほうを見ると、

「そんなのあるわけないでしょ。」

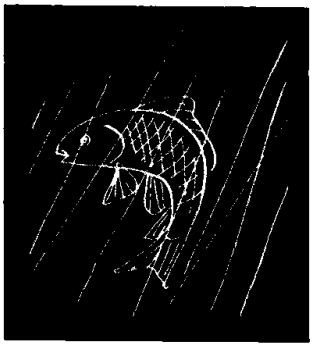
と、おこったようにいいました。そして、水玉もようの丸いからだから、急にうすい羽をひろげて、ツバキの葉かげに消えました。

「あーあー。」

モモのあわは、いつもよりいっそう大きくなって、池の上でシャボン玉のようにはじけました。

そのときです。

上から、ぽつんと、しずくが落ちてきました。なにか、おもしろいことがはじまる知らせかもしれません。



旅のはじまり

ポツン！

また、落ちてきます。

モモは、じーっと、上を見あげました。

ポツン、ポツン、しずくはだんだん早く、だんだん多くなります。

雨です。大つぶの雨がふりだしたのです。

空では、こい灰色の雲が、むくむくと形を変えながら、おそろしい早

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com